

『ニューバッチフラワーボディーマップ』の検証

Verification of “New Bach Flower Body Maps”

Dr. Edward Bach Remedy is widely used in the world. However, the Remedy is not so used effectively as he did in his lifetime. Using Bi-Digital O-Ring Test (BDORT), the human nature hidden beneath the subconsciousness can be easily identified.

As for “New Bach Flower Body Maps” reported recently, mosaics are mapped on the body. The verification for mosaics was also made.

Mosaics determined by BDORT were quite different from those reported in the book which were determined by changes of aura.

廣 部 千恵子

著者は台北の友人からバッチのフラワーレメディーのセットと “New Bach Flower Body Maps”¹という本を贈られたのを機にフラワーレメディーの使用法、特にボディーマップの使用法について検討することになった。しかし、ニューバッチフラワーボディーマップは、あくまでもバッチフラワーレメディーの主流ではないので、初めにバッチのフラワーレメディーそのものについての検討を加えていきたい。“New Bach Flower Body Maps”の著者らもその本の中で「我々は、エドワード・バッチ博士によってつくられたフラワーレメディーに疑いを持つものではなく、彼の教えにいかなる反対を唱えるものではない。むしろ我々は彼の発見したものにさらに新しい知識を与え、モザイクを加えようとするものである」と述べている。彼らは、バッチフラワースキンゾーンは、バッチフラワーレメディーそのものよりも扱いを簡単にするものであると述べている。

バッチ博士はエドワード・バッチと日本では言われているが、多くの国ではエドワード・バックまたはバッハと言われている。しかしこの論文は日本語で書かれるものであるので、他にならってバッチのフラワーレメディーと呼ぶこととする。

バッチのフラワーレメディーは最近日本でもかなり使われるようになった。バッチのフラワーレメディーには38種類のレメディーと急を救うレメディーのレスキューレメディーがある。その使用法は多くの本に書かれているので、ここで詳細にわたって説明することは省略するが、各レメディーについての説明のキーワード的なものをここにAn Introduction and Guide to Flower Essences “The 38 Bach Flower Essences”²から引用して表にする。

レメディーの名	レメディー使用のためのキーワード
1 アグリモニー	明るい顔をしているが、内には悩みをかかえている時

2 アスペン	わけの分からない恐れや悩みを感じる時
3 ビーチ	人のことが我慢ができなかったり、批判的になる時
4 セントリー	意志が弱く、人の言いなりになる
5 セラトー	他人の意見を求めたり、他人の同意を得たいと思い、自分の意見に自信がない
6 チェリープラム	コントロールできなくなるという不安
7 チェスとナットパッド	過去の失敗から学べない
8 チコリー	所有欲、過保護
9 クレマチス	夢の世界にいる。現実に対する興味の欠如
10 クラブアップル	自分自身を分からず自己嫌悪におちいる。潔癖症で些細なことが気になる
11 エルム	責任感の重圧に押しつぶされる
12 ゲンチアナ	落胆して意気消沈している
13 ゴース	希望が持てず、絶望してあきらめている
14 ヘザー	自分のことにだけ関心があり、いつも自分に心を奪われていて、話に加わりたがるが、自分のことになる
15 ホリー	嫉妬、羨望、憎しみ
16 ハニーサックル	過去に生きている
17 ホーンビーム	月曜日の朝の倦怠感
18 インパチェンス	短気、イライラ
19 ラーチ	自分に信頼できない。コンプレックス
20 ミムルス	原因の分かっている恐れ
21 マスタード	理由が分からないのに憂鬱な気分になる
22 オーク	努力し続け消耗してしまう
23 オリーブ	エネルギーがない。疲れ果てている
24 パイン	自分を責める、罪の意識
25 レッドチェストナット	他人に対して心を砕きすぎ、心配しすぎる
26 ロックローズ	恐怖心
27 ロックウォーター	自己否定、融通がきかない、頑固
28 スクレランス	不確実、優柔不断
29 スターオブベツレヘム	ショックを受けた後
30 スイートチェストナット	極度な精神的苦悩
31 パーベイン	熱中しすぎ
32 パイン	断言してしまう。融通がきかない、支配する
33 ウォルナット	世の変化や外の影響から自分を守ってしまう
34 ウォーターバイオレット	心をオープンにしない、打ち解けない、お高くとまっている
35 ホワイトチェスとナット	いろいろな不必要な思いがわく、精神的論争
36 ワイルドオート	人生の正しい方向性が分からない

37 ワイルドローズ	あきらめ、無感動、無関心
38 ウィロー	自己憐憫、憤り
レスキューレメディー	インパチェンス、スターオブベツレヘム、チェリープラム、ロックローズ、クレマチスを混合したもの

実際にレメディーを決める時には、かなり長時間に及ぶカウンセリングをして、どのレメディーが適するかを決める。この本の日本語版も出版されているので、詳しくはそれを見るとさらに見分け方が分かりやすくなると思う³。日本語版の本はこの他にも何冊か出版されているので、参考にするとレメディーの使い方が分かるであろう。

しかし、人の隠れた性格はなかなか分かりにくいものである。勿論ベテランになってくれば、かなりの的中率でレメディーを使い分けられることができるであろう。また、エドワードバッチ博士のように無欲で、愛情があり、極度に直観力と洞察力に優れた人であれば、レメディーを難なく使い分けられたであろう。しかし私たちのような人間が確実に効果をあげるにはかなりの熟練が必要である。また、レメディー判定のためのカウンセリングの際、上にあげたようなマイナス面を強調するので、相談に来る人はややもすると嫌な気持ちになることもある。この表を使う時には「バッチの花療法-その理論と実際」⁴に述べられているような、その人本来の性格を見極める方が大切なように思われる。以下簡単に各レメディーの本来の性格を表示する。

レメディーの名	レメディーを用いる人の本来の性格
1 アグリモニー	他の人に立ち向かう能力、喜びに溢れた性格
2 アスペン	大胆不敵、克服、復活という魂の素質
3 ビーチ	思いやりと包容力
4 セントリー	自発的決定能力、自己実現という素質
5 セラトー	内的な確実性、「内なる声」直感
6 チェリープラム	率直さと沈着さという本質
7 チェストナットバッド	学習能力と具体化する力
8 チコリー	母性本能と献身的な愛情
9 クレマチス	創造的理想主義
10 クラブアップル	秩序、純潔、完全性
11 エルム	責任感
12 ゲンチアナ	神と信仰に関連する
13 ゴース	希望
14 ヘザー	感情移入と他人への援助
15 ホリー	神聖、人間の理性よりはるかに偉大な愛の力
16 ハニーサックル	変化を受け入れる力と、自分と他者とのつながり
17 ホーンビーム	内面の活力と新鮮な気持ち

18 インパチェンス	我慢強さと優しさ
19 ラーチ	自信
20 ミムルス	勇気と自信
21 マスタード	喜びと静けさ
22 オーク	強さと忍耐力
23 オリーブ	復活、平和、バランス
24 パイン	後悔と許し
25 レッドチェストナット	隣人に対する気遣いと愛情
26 ロックローズ	勇気と不動
27 ロックウォーター	適応性と内的な自由
28 スクレランス	バランス
29 スターオブベツレヘム	覚醒と方向付け
30 スイートチェストナット	解放の原理
31 バーベイン	自制心
32 バイン	権威と信念
33 ウォルナット	ものごとの始まりと何にも影響されない揺るぎなさ
34 ウォーターバイオレット	謙虚と知恵
35 ホワイトチェストナット	落ち着きと洞察力
36 ワイルドオート	使命感と目的意識
37 ワイルドローズ	献身と内面の動機付け
38 ウィロー	責任感と建設的な発想
レスキューレメディー	インパチェンス、スターオブベツレヘム、チェリープラム、ロックローズ、クレマチスを混合したもの

従ってこのプラスの面を前面に出して、「あなたは本来このような優れた性格の持ち主であるが、何らかの理由で現在それがマイナスに出ています。本来の性格を取り戻して活躍してください」などと指導する方がはるかにフラワーレメディーの効果を生み出すことができるであろうし、バッチ博士の意志でもあるように思う。

さて、以上述べたようにフラワーレメディーを的確に使用することはかなり難しいが、大村恵昭博士考案のBi-Digital-O-Ring Test (BDORTと以後記す) を用いれば比較的容易に使用すべきレメディーを決めることができることが分かったので報告する。このBDORTについては著者が清泉女子大学紀要⁵に簡単に述べてある。さらに詳しくは大村の論文が数多く発表されているので参考にして欲しい⁶。

大村は同じ共鳴波動を持つ同一の2つの物質がある距離離れている時には共鳴現象が見られることを報告している。大村はこの実験のために2個の同一の電磁共鳴回路のセットを用いた。そしてこの原理をもちいてごく微量の純粋物質をコントロールとして多くの実験を行った。もし、検査する物質がコントロールの物質と同じであれば、同じ物質から出

る電磁波は、コントロールの物質から出る電磁波と共鳴してO-リングを開くのである。

この原理を拡大解釈したものは、バッチのフラワーレメディーに対しても認められることが実験の結果分かった。そしてBDORTのしっかりした技術を持っていればレメディーは共鳴現象によってかなり簡単に見つけ出すことができることが分かった。

著者がいろいろな人物に対してBDORTで調べた結果、多くの人は1つないしは2つのレメディーと共鳴した。一番多い人でも4つであった。多い人も使用しているうちに、すぐに1つないしは2つのレメディーでよいようになった。以下少しの例をここにあげるが、これらは別に何かを治したいという意図のもとに行ったものではなく、結果としてこのような好転があったのである。

- (1) 50歳代の女性の検査指がミムルスを指差した時に開いた。彼女はミムルスを指示されたように口に含んでから飲み込んだ。2週間後彼女の膝の痛みが消失した。
- (2) 30歳の女性、生理痛で苦しんでいた。彼女のレメディーはBDORTによりセントリーであったが、生理痛がかなり重かったのかレスキューレメディーとも反応した。レスキューレメディー4滴を大匙一杯の水にたらしめたものを口に含んだ、1時間後再び同じように口に含んだ。彼女の生理痛はとまった。
- (3) 50歳代の女性、目のトラブルで治療中であったが、そのためかひどい喉の乾きがあった。彼女のレメディーはウィローであった。ウィローを一回口に含んだ段階で、乾きがとまった。
- (4) 30歳の女性、左背と喉の痛みがあった。ホーンビームが彼女のレメディーであった。ホーンビームを口に含んだところ10日後に大体の痛みが消失した。
- (5) 60歳代の女性、彼女は膝に痛みをもっていた。彼女のレメディーはインパチェンスであった。定法によりインパチェンスを口に含み、同時にバッチ博士が薦めているようにインパチェンスをたらしめた水で膝を湿布した。彼女は2日後に痛みから解放されている。
- (6) 29歳の女性、彼女は精神的疾患があり何回も自分を抹殺しようとしていた。彼女のレメディーはバーベインであったが、同時に急用にレスキューレメディーも渡した。以後彼女の病状は落ち着いている。

以上の他にレメディーを口に含むことによる作用は多くある。BDORTによりすべてこのレメディーの選択を行った後で、その人々にレメディーを用いるキーワードを見せると「当てはまっている」という人が多かった。BDORTによりスムーズにバッチフラワーレメディーのレメディー選択ができることが分かる。

バッチフラワースキンゾーンについて

著者は先に述べた本の中にあるモザイク状に人体に存在するバッチフラワースキンゾーンに対応するレメディーを塗布することを試みた。ある部分はかなりの効果があったが、ある部分は全く効果がなかった。そこでこのバッチフラワースキンゾーンについての検証を行ってみた。方法ははっきりとしないが、彼らのスキンゾーンはオーラの違いによって書かれていると述べられている。そこで、大村博士のバイディジタル-O-リングテストの共鳴現象を利用することによって、このスキンゾーンの検証を行ってみた。

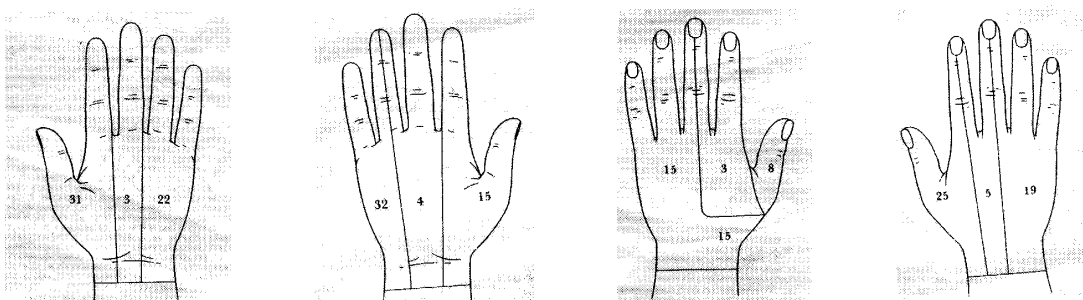
大村博士の共鳴理論を夫々のレメディーに応用してみた。もし、体表面に彼らがいうようなレメディーに対応する場があるのであれば、その場は夫々のレメディーとO-リングテストで共鳴現象を起こし、O-リングが開くはずである。

著者はこのことを想定して体のマッピングをBDORTで行ってみた。すると体の表面には、夫々のレメディーに対応するモザイク状の場があることが分かった。しかし、その殆どは彼らのオーラによるモザイクとは違うものであった。

以下その結果を彼らのオーラによるモザイクと対応させながら述べていく。

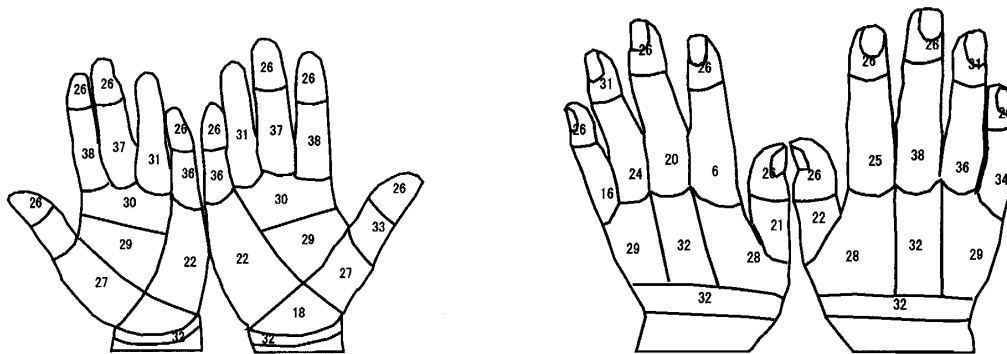
手のバッチフラワーレメディーゾーン

バッチフラワーボディーゾーンに報告されている手のモザイクは比較的簡単なものである。このモザイクでは、中指の真ん中に境界線があり、中指に何かの異常が出た場合には比較的使用しにくいようなマッピングになっている。



本に描かれた掌と手の甲のモザイク

これに対してBDORTでマッピングした手のモザイクは、複雑ではあるが、かなりきちんと区切られている。

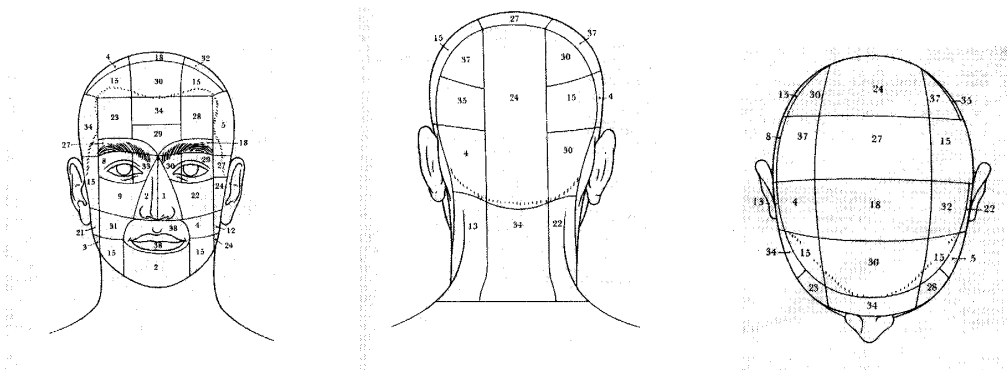


このマッピングでもっとも興味がある場所は薬指を除く各指の第一関節より上である。この場所は、掌も手の甲もロックローズ(26)になっている。そして薬指の第一関節以上はバーベイン(31)になっている。この図を見ると新潟大学の阿保教授の説を思い浮かべる。つまり薬指は交感神経を刺激するが、他の指先は副交感神経を刺激する。そこで阿保教授は副交感神経を刺激するためには薬指を除く他の指の爪の両下端を強くつまむとよいと説いている⁷。この指先を、ロックローズを数滴たらした水につけるとよいのではないであろうか。他のモザイクも同様にその場所に現れた何らかの異常を治す作用があるのではないであろうか。著者自身はインパチェンス(18)を自分のレメディーとしているが、頭痛の時にレメディー服用と同時に頭部インパチェンスの場所に加えて掌のインパチェンスの領域にレメディーをたらし、こすることによって頭痛が治った経験がある。今回は、体表面にあるレメディーのモザイクが本に書かれているものと同じであるかの検証を主目的としている。応用に関しては多くの方の協力が必要である。

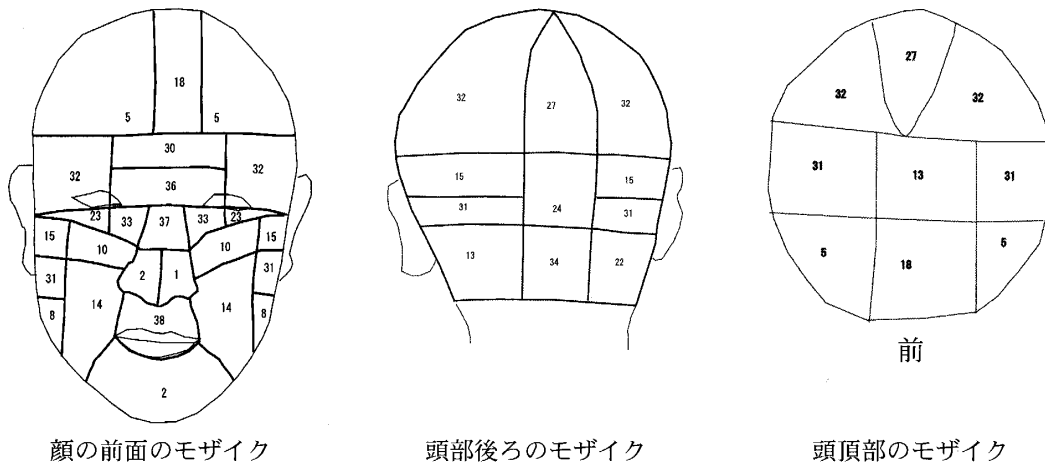
ここに書かれたレメディーのモザイクの形は人によって多少の違いがあるので、応用に当たってはそこに合う再度のBDORTによるチェックが必要であろう。

首より上のフラワーレメディーモザイク

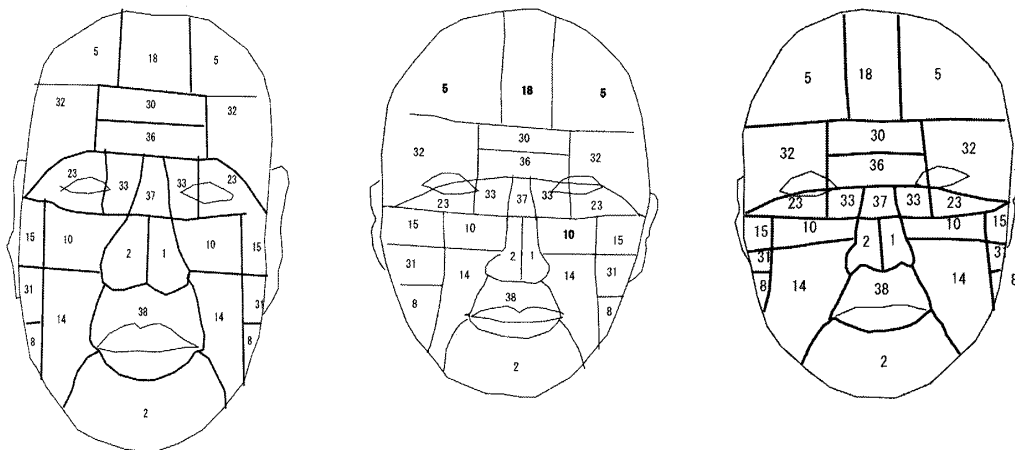
“New Bach Flower Body Maps” に描かれているマップのモザイクは次のようになっている。このモザイクは横もかなり複雑になっているが、今回は省く。



鼻、口の周辺および頭の後ろの一部はBDORTで描かれたマップと一致しているところがあるが、他は異なっている。BDORTによるモザイクは以下の通りである。



首から上部のフラワーレメディーのモザイクも人によって多少の違いがあるので、応用する時には再度のチェックが望ましい。ことに顔面のモザイクに違いが多いのでここに数例をあげる。目の辺りに注目されたい。

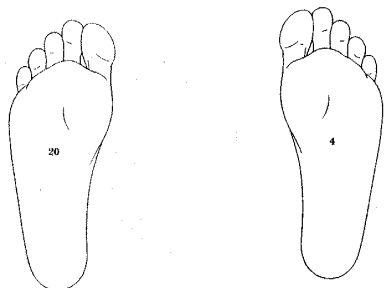


顔面でもっとも応用可能と思われる場所は鼻である。右がアスペン(2)、左がアグリモニ(1)となっている。鼻の中はアスペンである。この組み合わせは鼻の疾患に応用できると考えられるし、花粉症などにも利用できるであろう。口の周りはずべてウィロー(38)で、下唇の縁まで及んでいる。そこで、唇関係のトラブルにはウィローの塗布が有効であろう。その他のところも応用可能なところが多くある。しかし、目の部分は人によってレメディーが異なるのでその人その人で再チェックが必要である。

後頭部で重要なのはパイン(24)であろう。この場所は脳幹部などがある。この辺りの疾患にはパインを塗布することが有効である。後頭部痛にもよいであろうし、黒質の異常などにも使用できる。パーキンソン病の人に塗布して症状が好転したこともあった。普段の

治療薬とともに、パインを無香料の乳液に滴下した乳液を使用することによって好転しているのである。その他の場所も対応する頭痛などに使用できるのではなかろうか。

脚と足のフラワーレメディーゾーン

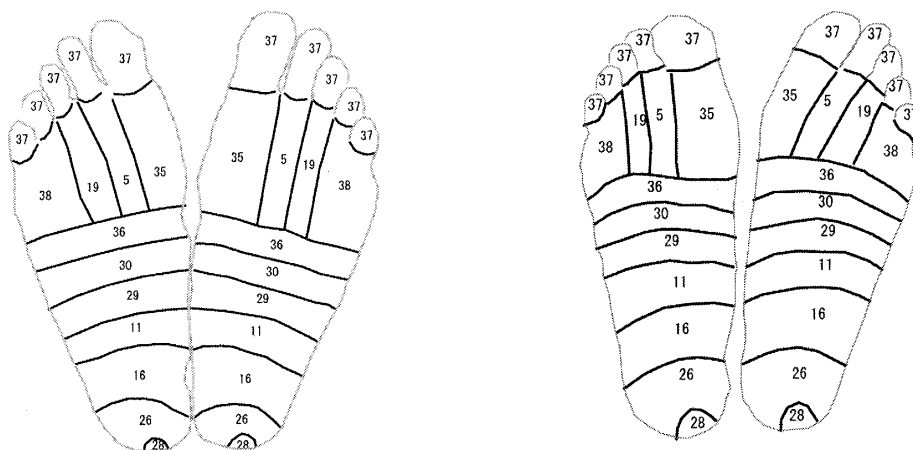


左の図はごく簡単であるが、本に描かれた足裏のマップで、右はすべてミムルス(20)で左はすべてセントーリー(4)である。

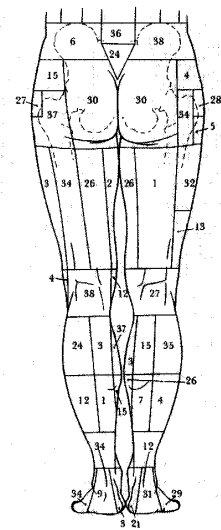
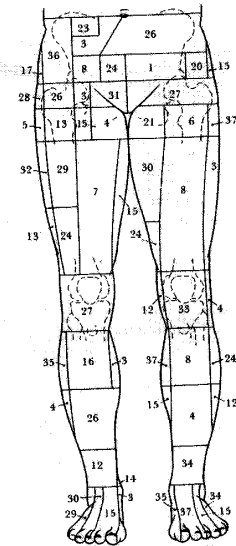
非常に簡単で使用しやすく思われるが、次に示すBDORTで行ったマップはかなり異なっている。

左は男性の足裏で、右は女性の足裏である。図から分かるようにやはり多少の違いが人によってあるが、本のものとは全く異なっている。すべての足指はワイルド・ローズ(37)である。そこで足指に何かの異常がある場合にはワイルドローズを使用することがおすすめられる。またスポーツなどをする時にすべての足指が力強くなることが望ましい。そのような目的にも使用可能であろう。

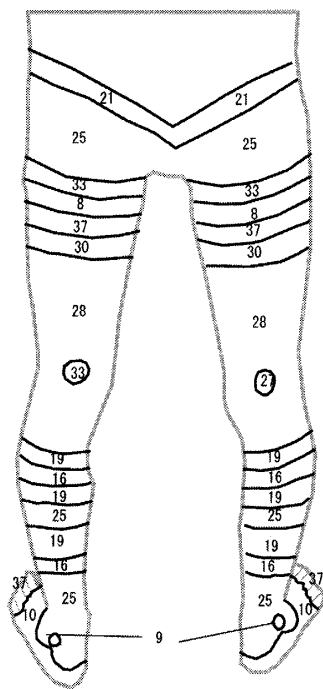
さらに足裏の臓器代表領域については大村恵昭によるマッピング⁸が発表されている。この臓器代表領域に対応するレメディーを塗布することによって、対応する臓器を活性化できる可能性もある。



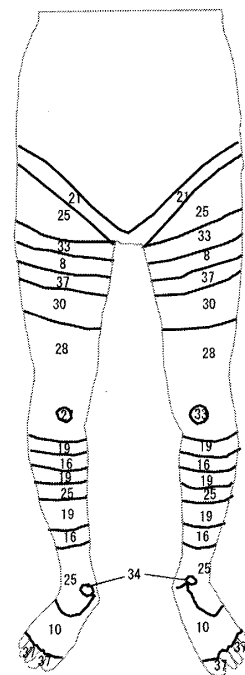
次に“New Bach Flower Body Maps”による下半身を見ると次のようである。



この描かれた図からもわかるようにかなりモザイクは細かく分かれ、かつ後ろと前とでも異なっている。これに対してBDORTでマップしたモザイクはかなり細かくはあるが、予想に反した輪切り状であった。



下半身後ろ



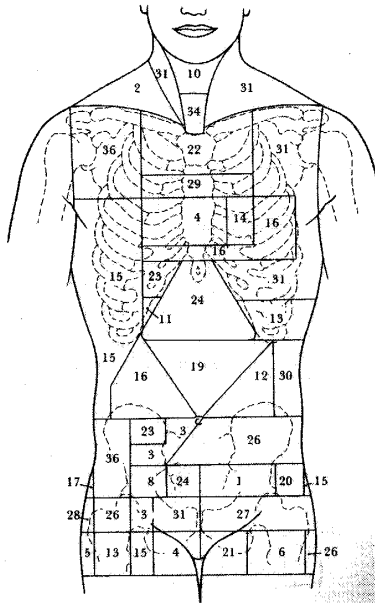
下半身前

この図の中で、膝周辺が使いやすい。右膝はウォーターロック(27)、左膝はウォルナット(33)である。さらに広範囲については、スクレランス(28)とウォーターロック(27)の混合したものが右膝に、スクレランス(28)とウォルナット(33)の混合したものを左膝に使用する。また足首の疾患にはレッドチェストナット(25)がよいであろう。

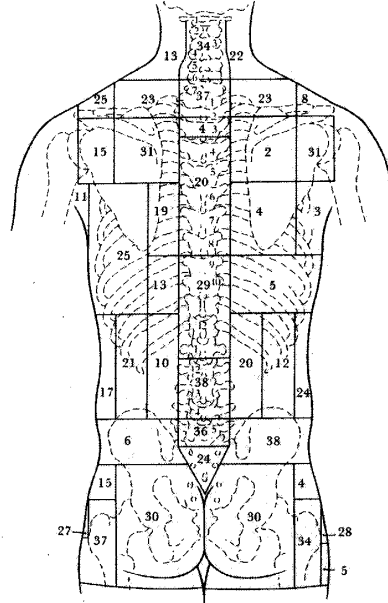
股関節周りの異常にはマスタード(21)か、さらに広範囲にはマスタードとレッドチェス

トナット(25)の併用がすすめられる。この脚の領域のモザイクも人によって多少の違いがあるので、使用する前に確かめる必要がある。

上半身に対するバッチフラワーレメディーモザイク

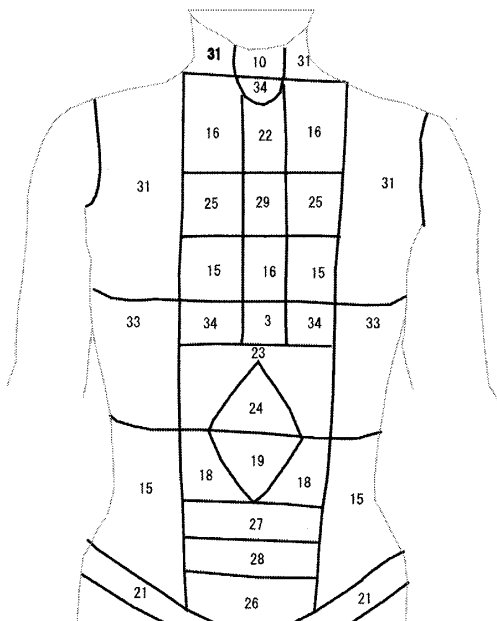


本に描かれた上半身前のモザイク

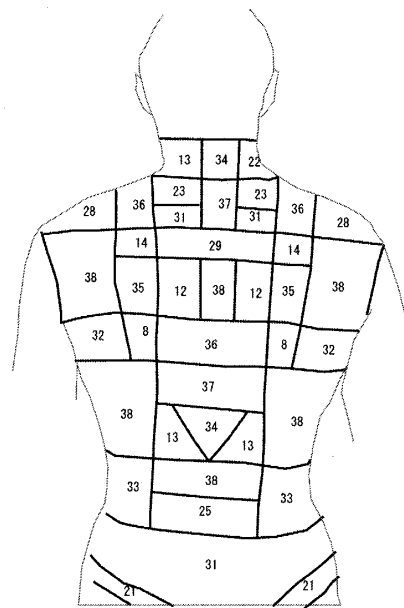


本に描かれた上半身後ろのモザイク

本の上半身前と後ろのモザイクはBDORTのモザイクとかなり一致しているところがあるが、相違もかなりある。両方を比べてみて欲しい。以下がBDORTによるモザイクである。



上半身のバッチフラワーレメディーモザイク
(前面)



上半身のバッチフラワーレメディーモザイク
(背部)

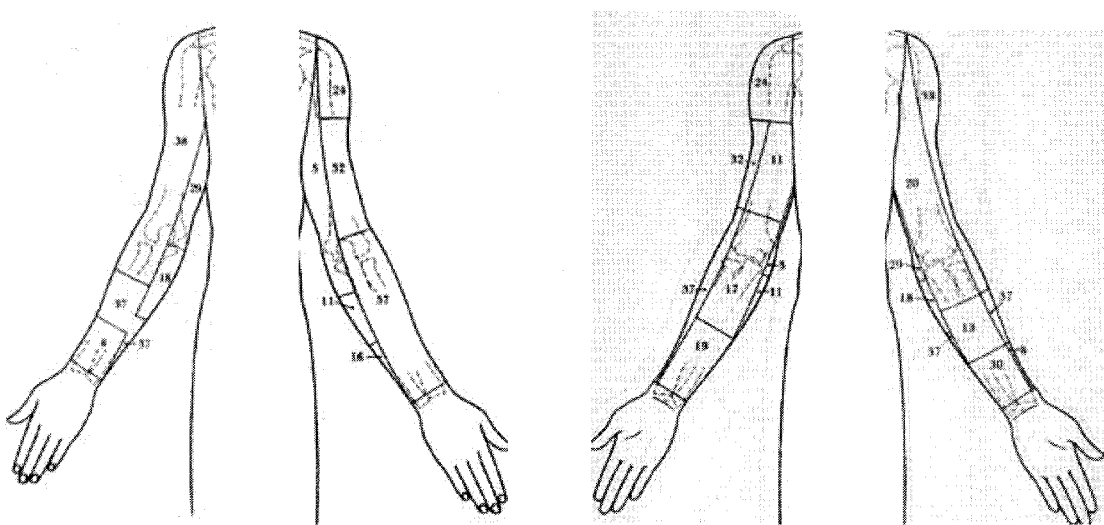
上半身のバッチフラワーレメディーモザイクにも人による多少の違いが認められる。そこで利用に当たっては、BDORTで再チェックすることが望ましい。

バーベイン(31)や上部のハニーサックル(16)は、肺の疾患に利用できるであろう。ホリー(15)とその隣のハニーサックル(16)は心臓の疾患に利用できる可能性が多い。ウォーターバイオレット(34)は喉のトラブルに、ビーチ(3)とビーチの右側のウォーターバイオレットは胆嚢に使える可能性がある。パイン(24)またはパインとオリーブ(23)の混合したものは胃のトラブルに使用可能であろう。ラーチ(19)またはラーチとインパチェンス(18)は腸のトラブルに使用できるであろう。

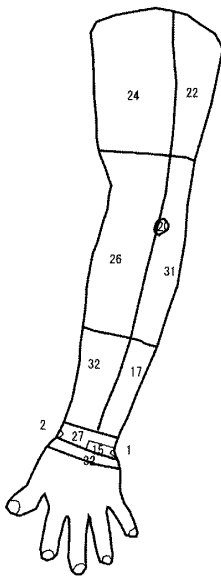
背部においてはホワイトチェスとナット(35)が心臓疾患に、スクレランス(28)は腕の疲労による肩こり、ワイルドオート(36)は首に原因する肩こりによいであろう。ウィロー(38)とレッドチェストナット(25)は腰痛に、マスタード(21)とバーベイン(31)は坐骨神経痛を緩和させるために使用可能である。一方ゴース(13)は腎臓に作用することが期待できる。他のモザイクの場所も対応臓器の活性化に用いることが考えられる。

腕に対するバッチフラワーレメディーモザイク

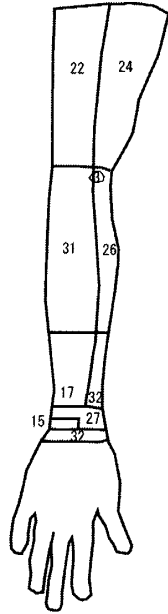
次に本の腕の部分のモザイクを示す。



この本で描かれたモザイクに対してBDORTで描かれたモザイクは次の通りである。



BDORTによる左腕モザイク



BDORTによる右腕のモザイク

BDORTの腕のマッピングも人により多少の違いがある。このうち肩の後ろの痛みにはオーク(22)が、前の異常にはパイン(24)である。肘の異常にはミムルス(20)またはミムルスとバーベイン(31)の使用が考えられる。

以上述べたように、私たちの体は“New Bach Flower Body Maps”に書かれているようにモザイク状に分かれていることがBDORTによっても確かめられた。しかし、彼らが述べているような状態には分かれてはいなかった。この夫々のモザイクは特有のレメディーを代表していた。今回はモザイクを書くことに専念した。書いたモザイクは100例以上に及んだが、人により多少の違いが認められた。そこで今回はモザイクにレメディーを塗布する効果についてはあまり検証していないが、効果はかなりあるように思われる。しかしレメディー服用に比べて持続時間が少ないように思われる。レメディーを服用してバッチ博士が説明するような根本改善がなされた方が良いでしょう。そこで、レメディーをモザイク塗布する場合でも、その人のレメディーを口に含むことと併用することが望ましい。なお、今回のモザイク実験に対してはBDORTを指導して下さった大村恵昭先生、下津浦康裕先生、実験を手伝って下さった清泉女子大学の角谷英子さん、東洋鍼灸院の田中俊男先生その他多くの方の協力を得たことを心から感謝するとともに、このレメディーのセットとボディーマップの本を私に贈って下さった台北のJune Wennさんに心からの感謝したい。

参考文献

- 1 “New Bach Flower Body Maps” Dietmar Kramer and Helmut Wild, Healing Art Press 1996
- 2 An Introduction & Guide to Flower Essences “The 38 Bach Flower Essences” by Bach Flower Remedies Limited and published from Wigmore Publications Ltd.,1993
- 3 “Bach Flower Remedies Text Book” 白石由利著、バッチフラワーレメディー協会、1998年
- 4 「バッチの花療法-その理論と実際」メヒトヒルト・シェファー著、林サオダ訳、フレグランスジャーナル社、平成6年12月
- 5 「ハーブティーの効能の検証」廣部千恵子、清泉女子大学紀要 27-51頁、2004年12月
- 6 Electro-Magnetic Resonance Phenomenon As a Possible Mechanism Related to the “Bi-Digital O-Ring Test Molecular Identification and Localisation Method” Y. Omura, Acupuncture & Electro-Therapeutics Res., Vol 11, pp 127-145, 1986
- 7 「パーキンソン病を治す本」阿保徹、水嶋丈雄、池田国義著、ビタミン文庫、マキノ出版、平成15年2月
- 8 Accurate Localization of Organ Representation Areas on the Feet & Hands Using the Bi-Digital O-Ring Test Resonance Phenomenon: Its Clinical Implication in Diagnosis & Treatment-Part 1 , Yoshiaki Omura, Acupuncture & Electro-Therapeutics Res., Vol. 19, pp. 153-190, 1994